

相 高 健 児 こ こ に あ り (※1)高普第 22 回卒 遠 藤 正 一 (※2)

我が母校・相馬高校が本年創立百年迎え、心からお慶び申し上げます。

この記念すべき「百年史」の一ページに、私の思い出を記載する機会を頂き、誠に光栄に思いながら当時の思い出を記します。

「相馬高校の思い出」それは入学後、相馬魂と母校愛を身をもって覚えこませる、校歌、応援歌の習得練習である。

入学前に先輩に聞いてはいたが、実際に自分が肌で感じたものは想像以上であった。

今までの義務教育課程ではとても考えることができない位の印象を受け、これが相高魂というもののかと入学後強く心に刻みこまれたのは皆同じ思いと思います。

当時の新入生約 250 名が校舎の屋上に一堂に会し、相馬市内全域に届かんばかりに歌った校歌の一節「馬陵の城の名に負へる、春の若駒勇ましく、克己の鞭は風をきり、進取のあがき雲をよぶ、同窓九百の健男児」、思い出の歌詞である。不思議なもので一日一日の練習を積み重ねていくと自然に大きな声とともに自信をもって校歌を歌うことができ、約 250 名の新入生の気持ちが一体となる。まもなく二の丸球場で野球の応援、その時の 250 名の心は一つになり、母校のチームの応援一色、この時、自分は相馬高の一員となったとの自信と自覚がわいて来る。相高健児の意気のみせどころである。このなんとも不思議な伝統が今日まで引き継がれて来た。

この意気込みが後の 3 年間の高校生活の礎となったものと今でも確信しています。

私事ではあるが、卒業後大学に進学後、大学の応援団に入団し、4 年間で過ごすことになったが、やはりその時心に残ったものは、不思議と高校時代の校舎屋上での練習風景であった。

いつの時代でも変らぬ伝統を引き継ぐのはむずかしいものではあるが、その時代その時代の学生の思いをその伝統に活していき、今後もすばらしい相馬高校の歴史と伝統を築いていただきたいものである。相馬高校、百五十年後・二百年後のために。

(※1) 「相中相高百年史」1998(平成10)年7月6日発行、「思い出の記」より。

(※2) 昭和45(1970)年卒、磯部出身。